

礼拝 2016年4月17日(日)

題 『必ず夜は明ける』

テキスト：ヨハネによる福音書21：1～14

過ぐる日の新聞記事に心温まる投稿がありました。「感謝の心にありがとう」という題の京都府精華町の中嶋 節子さん、58歳のパートで働いておられる方の投稿です。『感謝の心にありがとう』私は新米清掃員。女子大の薬学部の建物を担当しています。学生さんたちはとても勉強熱心で、自習用に開放されている部屋は普段からいっぱいです。試験前の2月ともなると、私たちの始業時間の午前7時半には、すでに勉強する姿が。部屋の扉には、午後11時まで校舎を出るように、と張り紙があります。頑張る姿に頭が下がります。

3月初めのこと。廊下でモップをかけていた私は、「いつもお掃除して下さっている方ですか？」と一人の学生さんから声をかけられました。「いつもありがとうございます。おかげで気持ちよく勉強できました。先日の国家試験、できました。」なんと、手には心遣いのサブレまで。「気持ちよく勉強できた」と聞いて何よりです。その言葉だけで十分なのです。もちろんサブレは、担当の3人でうれしくおいしくいただきました。こちらこそ、ありがとう。

そして、卒業おめでとうございます。若い時に、周りの人に感謝することに気付かされるよい教育を受けられて、幸せですね。どうぞこれからも、身につけた教えを大切に生きて下さい。」という内容でした。とても温かい気持ちになりました。人は、誰かに覚えられ、支えられて生きているんだな～と思わされたのです。今日の聖書の箇所には、弟子たちのことを覚え続けられたイエスキリストの姿があると思わされるのです。

今日の聖書箇所は復活されたイエスキリストがその姿を弟子たちに表わされた場面です。「1:その後、イエスキリストはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。」ティベリアス湖畔というのは、ガリラヤ地方にあるガリラヤ湖の事です。弟子のある人々は、故郷のガリラヤへと帰って行きました。「2:シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。」とある通りです。

彼等はどんな気持で故郷に帰って行ったのでしょうか。イエスキリストについて故郷を出た日からの日々が思い出された事でしょう。共に活動したこと、厳しさの中にも喜びを分かち合うこともあったでしょう。でもイエスキリストは十字架で処刑され、弟子たちの野心ともいえるこの世的な期待は打ち砕かれたのでした。彼等は愛する者との別れという、絶望の経験と、イエスキリストを見捨

てた自分たちの腑甲斐なさをいやという程知らされました。しかし、聖書によれば、彼等は復活の主イエスを出会うという体験をしました。それは、驚きであり、喜びでもあり、とまどいでもある体験だったでしょう。何ともいえぬ不思議な思いで弟子たちはガリラヤに帰って行ったのではないのでしょうか。帰って来た彼等を取り巻く、故郷の人々の目はどうだったのでしょうか。中には「よく帰って来た。」と歓迎してくれる人々もいたかもしれませんが、冷たいまなざしを受けることもあったかもしれません。ふるさととは、温かくもあり、時に冷たくもあるのかもしれません。

そんな中、「3:シモン・ペトロが、『わたしは漁に行く』』と言うのです。これは、新しい生活の始まりです。ペトロは昔やっていたことをやろうとしたのです。すると他の弟子たちも『わたしたちも一緒に行こう』と言います。彼らは出て行って、舟に乗り込んだのです。そうすることしかできなかったのかもしれませんが、しかし、「その夜は何もとれなかった。」彼等はやっとの思いで、新しい生活の一步を踏み出したのです。かつて、イエスに従って、意を決して故郷を出たときではなく、エルサレムでのイエスの十字架体験にかかわる者として、心に深い傷を負ったまま、彼等は活動を始めたのです。心に傷や破れを負ったままの再出発です。その活動も派手な事ではなく、日常生活です。

『わたしは漁に行く』

しかし、活動は順調ではありません。「彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」何もとれない、という現実が待ち受けていたのです。光の見い出せない現実です。弟子の漁に対する、技術が劣ったのか、熱心さが足りなかったのか。そんな事ではなかったと思うのです。せっかく勇気を出して、気力を振り絞って歩み出したのに、「その夜は何もとれなかった。」という現実、やはり厳しいものです。わたしたちもこの様な経験をするのも人生において時にあるのかもしれません。「自分は精一杯、やっているのに、どうしてこんなことになってしまうのだろう」と考えこんだりします。

しかし、夜は必ず明けるのです。夜明けは来るのです。神は、見ていてくださるのです。自分にすぎる者、頼る者を見捨てたりはされないのです。

これが、キリスト者の希望なのです。主イエスにつながっていれば、人生の夜は必ず明けるのです。心の闇の中に光は必ず差し込んでくるのです。私はそう信じているのです。

「4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。」

これは、夜の暗闇の中、復活されたイエスは困難の中にある弟子たちを見ておられたのだということではないかと思うのです。

旧約聖書の申命記 32 章 10 節には、「主は荒れ野で彼を見だし、獣のほえる不毛の地でこれを見つけ、これを囲い、いたわり、御自分のひとみのように守られた。」とあります。神は、よみがえられた主イエスは、愛する弟子たちのことを思い、心配し、荒れ野でも、たとえ不毛に見える地でも、守られるということ。ご自身のひとみのように守られるということです。

しかし、弟子たちはそれがイエスだとは気がつかなかったのです。

恥を忍んでお話すれば、私は長く母の愛情を分らない人間でした。

私にとって母とは、子どものころから守ってあげなければならぬ存在でした。そう思っていたのです。母親が父親に泣かされている姿を見て来たからです。

母のことが心配だったのです。

やっと母の愛に気づいたのは、もう 30 歳近くになってからでした。

今、思えば私の中に愛の感受性が十分育っていなかったということだと思うのです。遅すぎたのかもしれませんが、母の愛情を知ることができたことは、何とも言えない喜びでした。知ることに、遅すぎることはないと思うのです。

どうでしょうか。わたしたちのことを思ってくれている人や祈ってくれている人がいるのではないのでしょうか。その事を素直に喜べますか？

イエスさまは、弟子たちを夜通し見守ってくださり、更に弟子たちの朝食の用意をしてくださっていたのです。何というありがたい心遣いでしょうか。

人生の暗闇を守り、食事の備えまでしてくださる方がおられる。

讚美歌 21 の 4 6 3 「わが行く道 いついかに なるべきかは つゆ知らねど 主はみこころ なしたまわん。」です。

弟子たちが陸にあがった時、

「12:イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われたのです。

食事を共にする中で、弟子たちは言葉にこそ出しませんでしたが、目の前にいる方がイエスである事をしみじみ味わっていました。この食事の時は、心に破れを負った弟子たちにとって、慰めの時、癒しの時であったと思うのです。神さまの愛の国が、この地上に実現している姿であると言ってよいでしょう。神の国は、互いに愛し合う弟子たち、私たちの中にあるのです。

新しい生活に疲れ果てた弟子たちを、温かいまなざしで見つめ、朝食の用意をして下さった方が、今も同じように私たちを見つめてくださっているのです。「主イエスは生きておられるのです。」14節「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう3度目である。」と語られています。3度とは、「とことん」という事。よみがえりのイエスは、あの手この手で、とことん、一緒にいることを示してくださったのです。

私たちは、神さまが明日を備えてくださる事を信頼して、誰かに覚えられていることを思って、「わたしは漁に行く」という毎日の生活を続けて行きたいと願います。